

漢文学会略史 付資料

雑誌名	中国文化：研究と教育：漢文学会会報
巻	50
ページ	137-160
発行年	1992-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2241/00150116

漢文学会略史

一九三二年（昭和七年）

二月二十日 午後一時より本館第二会議室において漢文学会発会式行われる。資料A参照

三月三十一日 初代学会会長島田鈞一、東京文理科大学教授を退任、学会顧問となる。学会会長諸橋轍次。

五月二日 第一回研究発表会（於漢文学研究室、以下漢研と略）。小林信明「原始儒教に於ける指導原理の展開に就いて」。

六月十一日 春季講演会（於第二会議室、以下第二と略）。内野台嶺「漢文教育に関する諸問題」、高田真治「学」、中山久四郎「伯夷伝と我が国体土風」。

十月十五日 第二回研究発表会（於漢研）。上島一夫「陶淵明の詩境」、小島政雄「伏犧卦を劃すの伝説に就いて」。

十一月十二日 秋季講演会（於第二）。寺田范三「説注疏『本』字考」、牧野巽「漢族王侯の相統制度」。

十二月三日 第三回研究発表会（於漢研）。唐卓羣「宿命説について」、内野以下十名「北支滿鮮旅行談」、佐藤正範「旅行談を承りて」。

一九三三年（昭和八年）

二月十八日 第四回研究発表会、附講演会（於漢研）。小沢文四郎「戴東原に就いて」、田口福司朗「寛者と学者」。講演、岡井慎吾

「王観堂の一面」。

三月十日 〈漢文学会々報〉第一号発行。編輯者、上島一夫。印刷所、東京都荏原区戸越町一二九八、市川活版所。発行所、東京文理科大学漢文学会。

五月二七日 第五回研究発表会（於漢研）。田波又男「漢文教授に就いての所感」。

六月十七日 春季講演会（於漢研）。森本角蔵「年号引分の典拠に就いて」。藤村与六「易の体系に就いて」。

九月三十日 森本・熊坂・岩井三先生支那旅行座談会（於漢研）。十月七日 第六回研究発表会、附講演会（於漢研）。市川本太郎「聖德太子と支那思想」。講演、北平東方文化事業部橋川時雄「北

支那支那学界雜観」。

十月十三日 橋川時雄先生帰朝歓迎会（於新宿白十字）。十一月四日 秋季講演会（於第二）。有高巖「古代儒家の法律観」、山口察常「師道に就いて」。

十二月二日 第七回研究発表会（於漢研）。渡辺末吾「楽律に就いて」、中西清「中等学校に於ける漢文教授の實際に就いて」。

一九三四年（昭和九年）

二月十日 第八回研究発表会（於漢研）。松村利行「日本書紀に残存せる支那古韻に就いて」、上島一夫「楚辭離騷篇篇考」。

二月二五日 〈漢文学会々報〉第二号発行。編輯者、竹倉二郎。

昭和九年一月末残高六二円三五銭。会報第一号の出版費用九二円七〇銭。

五月二六日 春季講演会（於漢研）。石山脩平「古典教育の価値とその方法」。

六月十六日 第九回研究発表会（於漢研）。寺岡龍含「史記莊子伝考」。

十月二四日 秋季講演会（於漢研）。辛島驍「満州事変と中国文壇」。「去る廿日より一週間の予定で支那小説史講義に遙々鶏林の都より上京なされた」。午後六時茗溪会館で同氏歓迎会。

十二月 一日 第十回研究発表会（於漢研）。杉本重雄「釈奠考」、竹倉二郎「三年の服喪期間に就いて」。

一九三五年（昭和十年）

二月二三日 第十一回研究発表会（於第二）。小沢文四郎「卦氣説に就いて」、三井宇一郎「朱子の孝経刊誤に就いて」、大島正健「元の韻の構造」。

三月十五日 〈漢文学会々報〉第三号発行。編輯者、三井宇一郎。

五月十八日 春季講演会（於新館第二会議室）。学習院教授飯島忠夫「支那古代哲学の一つの見方」。

六月十五日 第十二回研究発表会（於漢文学第一研究室、以下漢第一と略）。内野熊一郎「周末秦初に於ける師法並に今古文の状態」。

十月十五日 秋季第一回講演会（於漢第一）。武蔵高校教授加藤虎之亮「十三経注疏正字に就いて」。

十一月三十日 秋季第二回講演会（於新館三五五心理学教室）。東

方文化研究所研究員結城令聞「長安の古蹟を訪ねて——仏教史蹟を中心として」、清華大学教授錢稻村「北京学界の現状に就いて」。

一九三六年（昭和十一年）

二月十九日 第十三回研究発表会（於第二）。岡阪猛雄「朱子の性説に就いて」、杉本重雄「漢代の博士に就いて」、福家弘「康有為の論語注に就いて」、松村利行「『至』の古韻と万葉集・風土記の誤訓に就いて」。

三月十五日 〈漢文学会々報〉第四号発行。編輯者、松村利行。

五月三十日 春季第一回講演会（於漢研）。中山久四郎「欧米に於ける支那学研究の一端」。学習院教授渡辺末吉「六笙詩考」。

六月二十日 春季第二回講演会（於第二）。早稲田大学教授津田左右吉「支那思想についての一二の思ひ」。

同日 寺田范三先生十三経注疏読了記念会（於茗溪会館）。

九月二六日 第十四回研究発表会（於漢研）。鎌田正「新周故宗王魯説に就いて」、高木仡「我國に於ける漢文訓詁」。

同日 内野先生教授昇格祝賀会並に岡井博士歓迎会（於茗溪会館）。

十月十四日 東北帝大教授武内義雄博士講演会（於会議室）。

十一月十四日 第十五回研究発表会（於會議室）。倉田貞美「中國現代詩潮の一瞥」、石島快隆「頼山陽全書を読む」、下山田光平「喪服制の一端より見たる支那家族精神の一断面」。

十二月 五日 秋季講演会（於第二）。東洋大学教授古城貞吉「支那文学と必読書」。

一九三七年（昭和十二年）

一月二九日 諸橋教授御講書始御進講紀念祝賀会（於茗溪會館）。
二月十三日 第十六回研究発表会（於會議室）。寺岡龍含「敦煌本莊子郭象注十二種について」、米山尚之「噬嗑について」、米山寅太郎「左伝私考」。

三月二五日 〈漢文学会々報〉第五号発行。編輯者、米山寅太郎。
「東京文理科大学漢文学会会則」を掲載。会報年二回発行等の理由で、学会会費年額一円を昭和十二年度から二円に改める。

五月 三日 「支那旅行団」有志報告会（於新館本部會議室）。「去る三月十八日より四月初旬にかけて、北支、滿鮮方面を旅行」。团长小林信明「挨拶」、土肥輝雄、松下厚「行程」、内藤由己男「政治」、吉田元定「教育」、陳蔡煉昌「風俗」。

六月十九日 春季講演会（於新館本部會議室）。小林信明「春秋災異説について」、竹田復「話本の入話について」。

十月 二日 第十七回研究発表会（於新館本部會議室）。土肥輝雄「離騷靈均私考」、上原好一「繫辭伝『象・辭』考」。

十一月 五日 〈漢文学会々報〉第六号発行。編輯者、上島一夫。
「学会彙報」に「会員消息」欄を設け、助手小沢文四郎が「外務省より支那留学を命ぜられて、去る拾月拾日（日）午後九時、東京駅發、壮途に就かれた」、「会員本学々生、堀池敬君は去る八月出征され、田上部隊に属し、目下、上海戦線に於て奮戦中である」と伝える。

十一月十三日 第十八回研究発表会（於會議室）。内藤由己男「太極論を中心として見たる朱子学陸学」、松下忠「五典考」、植田袖「儒教を通じて見たる漢民族死生観」一考察」。

十二月 四日 秋季講演会（於會議室）。宇田尚「我國現下の情勢と儒教思想に就て」。

一九三八年（昭和十三年）

一月二九日 第十九回研究発表会（於第一會議室）。坂柳董麟「朱子における太極と理気の關係」、吉田元定「四家詩源流考」、陳蔡煉昌「永明声韻説」。

三月十七日 〈漢文学会々報〉第七号発行。編輯者、田口聖一。
「穆堂島田鈞一先生追悼号」。会報第五号印刷代、「一一三円一四銭」、第六号、「一四〇円」。

四月三十日 春季第一回講演会（於新館本部會議室）。諸橋漱次「北支学会の近況について」。

六月十八日 春季第二回講演会（於漢第一）。高神覺昇「仏教思想の特徴」。

十月十五日 第二十回研究発表会（於新館會議室）。田口聖一「之八について」、尾関富太郎「新注の伝来と其の前後」。

十一月二十日 〈漢文学会々報〉第八号発行。編輯者、田口聖一。
十一月二六日 第二一回研究発表会（於漢第一）。林子三郎「朱子成書年次試論」、富山昇「穀梁善於經説に就いて」。「終了後、茶話会に移り、夏期休暇を利用して、南洋視察旅行に参加したる、三年生古沢未知男君の『南洋視察談』を聴く」、「恰も防空演習の為、電灯を懸念して早く切り上ぐ」。

十一月二九日〜十二月一日 秋季特別講演会（於本部會議室）。京都帝國大学教授倉石武四郎。「氏の土京を機とし聘して講演会を開く」。

一九三九年（昭和十四年）

一月十八日 第二二回研究発表会（於漢第一）。佐田弘道「三論小考」、佐川修「董仲舒の陰陽説に就きて」、古沢未知男「水戸学に於ける神儒調和思想」。

三月二十五日 〈漢文学会々報〉第九号発行。編輯者、田口聖一。

五月六日 「北支満鮮旅行団報告座談会」（於漢文学第二研究室、以下漢第二と略）。「去る三月二日より四月初旬にかけて、北支満鮮方面を旅行」。団長内野熊一郎。

六月十七日 春季第一回講演会（於本部会議室）。川瀬一馬「中世に於ける博士家の活動とその持本について」、内野熊一郎「自著『秦代に於ける経書經説の研究』に対する略述」。

十月二十八日 第二三回研究発表会（於漢第一）。石山興武「謎」、大島一「子見南子について」。

十二月一日 〈漢文学会々報〉第十号発行。編輯者、大島一。

一九四〇年（昭和十五年）

六月十五日 春季講演会（於第二）。小沢文四郎「在燕雜感」、東京帝国大学魚返善雄「支那語学習の能率化」。

十月二十六日 秋季講演会（於西館五一号室）。藤塚鄰「李朝の名賢朴楚亭と清朝文化」。

一九四一年（昭和十六年）

一月二五日 第二四回研究発表会（於第二）。岩佐貫三「経書研究の一左証としての爾雅の形態の歪曲に就いて」、仲井真盛信「胡適寸描」、高橋俊英「老子年代考」。

二月二十日 〈漢文学会々報〉第十一号発行。編輯者、仲井真盛

信。「時局柄、用紙節約、頁数減少等の通牒に接し」、年二回の発行を一回に、「内容は会員の研究論文を主とする」と告げる。

二月二二日 第二五回研究発表会。月洞謙「儒教思想の近世的理念」、牛島徳次「儒林外史に於ける『的』字其他の用法について」。

十一月 第二六回研究発表会。市木武雄「黄宗羲の学の成立とその時代」、市川憲一「梁任公について」、荒木雄二「詩経表現形式の二三の考察」、大木春基「徳の日本の解釈」。

十二月 六日 第二七回研究発表会。栗原喜男「中庸に於ける人性思想」、新見保秀「小学と大学の由来」、内田龍「左伝に於ける君子について」。

十二月二六日 卒業繰り上げにより学生卒業。

一九四二年（昭和十七年）

六月二十日 〈漢文学会々報〉第十二号発行。編輯者、寺尾達郎。印刷所、太陽舎。印刷人、小谷寛。これ以後、学会報休刊となる。

「編輯後記」（昭和十七年二月寺尾記）に「種々の事情から昨年中発行の予定のものが非常に遅れ申訳ありません。次号は本年中に発行出来ることと思います」、「会員諸氏の御健闘を御祈り致します」。

一九四六年（昭和二十一年）

五月二四日 研究会。藤川正数「戦争道義の問題」。原富男「方法論」。

六月七、十四、二一日 卒業論文発表会。

十一月十六日 講演会。会長竹田復「漢文教育の将来」。

十二月 六日 研究発表会。藤川正数「孟子管見」、今井宇三郎「明代語録に於ける伝習録の地位」。

一九四七年（昭和二十年）

五月二五日 漢文学会総会。研究発表、牛島徳次「釈有来」、渡辺弘一郎「三刑説に就いて」、荒井栄「儒教の再認識」、尾関富太郎「日本漢学史上（奈良朝まで）の諸問題」、土肥輝雄「梵辭の崑崙神話に就いて」、米山寅太郎「毛詩詁訓伝に就いて」、小沢文四郎「学案備忘録」、原富男「世」。特別講演、諸橋轍次「行不由徑」。

六月十一、十三日 卒業論文発表会。

十月十二日 講演会。東大教授加藤常賢「皋陶の名義に就いて」。

十月二三日 講演会。謝冰心「中国現代文学に就いて」。

十一月二十、二一日 卒業論文発表会。

一九四八年（昭和二十三年）

五月 八日 研究発表会。安居香山「正始学に於ける王弼の立場の一考察」、水沢利忠「左伝に見える君子の性格に就いて」、今井宇三郎「無極而大極の一考察」。

十一月十二日 漢文学会総会。研究発表、緒形暢夫「術に就いて」、水沢利忠「春秋に於ける君子の性格」、加賀栄治「爾雅釈考」、鎌田正「経学の成立に就いて」、松下忠「和歌山師に於ける漢文教育の実態」、網祐之「曾鞏に就いて」。

一九四九年（昭和二十四年）

二月十二日 卒業論文発表会。

六月二五日、十月八日、十一月十六日 卒業論文発表会。

一九五〇年（昭和二十五年）

五月二十日 講演会。早大教授福井康順「中国思想より見たる聖徳太子」。

六月十七日 漢文学会総会。学会機関誌復刊が了承され、機関誌刊行準備委員会が組織される。研究発表、緒形暢夫「法の構造に見える韓非の思惟に就いて」、塚本正「毛詩源流に関する一考察」、加賀栄治「史記引尚書の訓詁的考察」、水沢利忠「甲骨学管見」、安居香山「中国古卜考」、伊藤文定「王肅に就いて」、藤川正数「塩鉄論に就いて」、松下忠「紀州藩の漢文学の全貌」、寺岡龍含「新学制上の漢文学のあり方」、小沢文四郎「戴東原學術溯源」。

七月 六日 卒業論文発表会。

一九五一年（昭和二十六年）

六月二四日 昭和二十六年漢文学会総会（於教育大学E四〇三教室、以下E四〇三と略）。會長竹田復。研究発表、青木木菟哉「文字学上より見たる本邦旧鈔古文孝経隸古定に就て」、飯田吉郎「関于董西廂的異文」、千原勝美「墨子に関する一考察」、水沢利忠「史記正義版本考」、鈴木修次「詩と史実（作詩時代考）」、加賀栄治「経」解釈史（第一期）研究序説、伊藤文定「史記に現れた漢代礼制の理念」、裏善一郎「薩南学派の祖『桂菴』について」、今井宇三郎「黄老思想の成立について」、古沢未知男「僧義堂の文学観『禅文兼全』について」、松下忠「紀州藩の明律学」、寺岡龍含「漢文学習法の革新と教育職員免許法関係法規の改正すべき点について」、田口福司郎「教材としての論語について」。

九月二八、二九日 卒業論文発表会。

十一月十五日 〈漢文学会々報〉復刊される。総第十三号。編輯責任者、小沢文四郎。印刷所、一誠社印刷所。資料B参照。

「学会集報」に「終戦以来の本学会及び研究室の動向」掲載される。

「東京文理科大学漢文学会会則」昭和二十六年六月二十日現在」によれば、学会会長は主任教授（竹田復）、委員九名、委員長一名（今井宇三郎）は委員の互選に依る。学会費年額百円、学生五十円。

十一月二十日 秋季講演会。谷川英則「連語について」、京大教授重沢俊郎「柳宗元の思想」。

一九五二年（昭和二十七年）

六月二日 昭和二十七年度漢文学会総会（於E四〇三）。会長内野熊一郎。研究発表、中村璋八「緯書に見える黄帝について」、安居香山「史記に見える本紀以外の黄帝について」、谷川英則「杜詩重言小論」、坂井健一「略韻の韻母について」、千原勝美「墨子兵法巧考」、鈴木修次「毛伝と爾雅」、牛島徳次「漢文法の規定詞と判断詞について」、寺岡龍含「漢文教育の理念」、尾関富太郎「高校漢文教育の動向について」。

七月 四日 卒業論文発表会。

一九五三年（昭和二十八年）

二月二十、二一日 新制卒業論文発表会。

六月二五日 〈漢文学会々報〉第十四号発行。文理科大学改組に伴い東京文理科大学漢文学会会報としての最終記念号。編輯責任者、今井宇三郎。印刷所、株式会社正興社。文理科大学第一期から新制第一期までの漢文学科学生「卒業論文題一覧表」、及び新たな「東京教育大学漢文学会会則」掲載される。資料B参照。

六月二八日 昭和二十八年度漢文学会総会（於E四〇三）。学会費四百円、学会報は毎年、会員名簿は隔年発行、広告掲載可等を了承。研究発表、木村郁二郎「論衡の『故』と『偶』について」、青木木

菟哉「甲骨卜辞制作の上限について」、緒形暢夫「慎到、韓非の法思想より見たる法家思想とその背景」、伊藤文定「尚書孔伝の一考察」、今井宇三郎「老子王注に於ける無と有の問題」、中村璋八「陽明文庫本五行大義の性格について」、坂井健一「『切韻指掌圖』に於ける入声配置について」、牛島徳次「史記に於ける規定部の位置について」、寺岡龍含「漢文教育の基本的考察」。

一九五四年（昭和二十九年）

六月二五日 〈漢文学会々報〉第十五号発行。東京教育大学漢文学会会報としては第一号。印刷所、株式会社社報堂。編輯者の記載なし。学会会長、中西清。資料C参照。

六月二七日 昭和二十九年度漢文学会総会（於E四〇三）。研究発表、木村郁二郎「王充の賢者論」、青木木菟哉「旧鈔古文孝経を通して隸古定の再考察に及ぶ」、水沢利忠「龍谷大学本『史記抄出』について」、藤川正数「喪服に現れた教秩序について」、新美保秀「日本文学に影響した老子」、今井宇三郎「不真空論の本無について」、金子彦二郎「章孝標の詩と日本文学」。

一九五五年（昭和三十年）

一月二九日 例会。青木木菟哉「甲骨断代研究の考察」（注一）。
二月十九日 例会。飯田利行「日本漢文学史上における良寛の業績」。

三月二六日 例会。石島快隆「中国における哲学と神学の問題」。
四月十六日 例会。今井宇三郎「心無義について」。
五月二一日 例会。牛島徳次「黎錦熙『新著國語文法』について」。
六月十九日 〈漢文学会々報〉第十六号発行。編輯者、東京教育

大学漢文学会今井宇三郎、坂井健一（以下名前のみ記載）。

同日 昭和三十年度漢文学会総会。研究発表、中村璋八「神宮文庫本『五行大義背証』に引存する東宮切韻佚文について」、緒形暢夫「魯人精神と宋人精神について」、水沢利忠「嵇康の声無哀楽説について」、鈴木修次「相和歌辭にみる歌謡文学の特性」、新美保秀「論語と日本文学」、裏善一郎「『哀公問於有若』章の解釈について」、松下忠「太宰春台の詩文論」。

十月二十九日 例会（於E二二二教室）。加賀栄治「魏晋學術思想家の意識基底に関する一考察」。

十一月十九日 例会。内野熊一郎「漢碑漢簡の資料価値」。

十二月十七日 例会。緒形暢夫「漢碑より見たる後漢末の老子思想について」。

（注一）「雑誌会」は省略。「研究発表」のみ記載。

一九五六年（昭和三十一年）

一月二十八日 例会。鎌田正「劉歆の分野説について」。

二月十八日 例会。小林信明「論語為政篇の孝乎惟孝について」。

六月十七日 昭和三十一年度漢文学会総会。研究発表、青木木菟哉「卜辞『馭鼈』の一考察」、内山知也「唐代小説のロマンチズムと庶民について」、鈴木修次「豔歌について」、加賀栄治「魏晉玄学の系譜に関する一考察」、安居香山「莊子より列子への黄帝説の展開」、新美保秀「正平版論語源流の一考察」、今井宇三郎「五行の数について」、松下忠「王世貞の古文辭説脱化」。講演、小林信明「古文尚書について」。

十一月二十四日 例会。河野六郎「袂字考」。

十二月十五日 例会。鈴木修次「吳歌西曲における『儂』について」。

一九五七年（昭和三十一年）

一月十九日 例会。月洞讓「鄭玄訓詁に關して」。

二月十六日 例会。小嶋政雄「釈春」。

四月二十日 例会。望月真澄「『北』首考」。

五月十八日 例会。前野直彬「中国笑話史考」。

六月三十日 漢文学会々報 第十七号発行。編輯者、前野直彬、緒形暢夫。

同日 昭和三十一年度漢文学会総会。学会会長、内野熊一郎。研究発表、内山知也「沈亜之と小説」、緒形暢夫「鄭人精神の一考察」、鈴木修次「詩人としての曹丕の評価」、加賀栄治「魏晉玄学の実相」、藤川正数「幼主の服忌に関する鳳岡と白石との論争について」、新美保秀「論語の外題について」、杉森正弥「兒女英雄伝のおもしろさ」、寺岡龍含「漢文（中国文）及漢文学（中国学）の理想的教育体制」。講演、内野熊一郎「民国、初・中期の經学觀とその資料」。

十一月十六日 例会。新美保秀「日本文学に影響した論語並に我国古伝の論語」。

十二月二日 例会。飯田利行「誤読せる二、三の詩文について」。

一九五八年（昭和三十三年）

一月十八日 例会。伊藤文定「聖証論考」。

二月二日 例会。摺河昭彦「術より見たる黄老」、田部井文雄「宮体詩について」、飯田吉郎「魯迅の評価について」。

六月二十九日 昭和三三年度漢文学会総会。研究発表、藤原高男

「王弼繫辭伝注の存在について」、青木木菟哉「書道博物館蔵甲骨文字貞人の一考察」、緒形暢夫「衛人精神について」、水沢利忠「米沢本黃善夫刊本史記の特色について」、加賀栄治「魏晉の礼説に現れたる一傾向」、藤川正教「隸釈に現われた喪服礼の諸問題」、杉森正弥「大正文学に於ける中国女性像」、松下忠「王世貞と袁宏道」。漢文教育討論会「高等学校漢文教育に於ける問題点」、長谷川節三、大野知二、月洞譲、大木春基、尾関富太郎。

十二月六日 例会。菅野礼行「対句鑑賞発生試論」。

一九五九年（昭和三四年）

二月 七日 例会。緒形暢夫「史記老子伝批判の変遷並びに私見」、木村郁二郎「蔽復の天演論をめぐる若干の問題」。

六月 六日 例会。横山伊勢雄「比興論の展開と象徴詩」。

六月二十日 昭和三四年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立小山台高校）。午前研究授業（青木木菟哉）、研究会。午後討議会、問題提起、志賀一朗、小島政雄、鎌田正。

六月二十一日 昭和三四年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。

研究発表、藤原高男「江南義疏家と王弼佚注」、内山知也「唐代小説に含まれる詩について」、志賀一朗「新訓点法の一考察」、鈴木修次「司馬相如・楊雄・班固に流れる一流文学意識」、藤川正教「魏晉南北朝における尊降服制について」、新美保秀「中原家論語家学とその系統本」、寺岡龍含「無と和の問題」。

六月二十五日 〈漢文学会々報〉第十八号発行。編輯者、牛島徳次、安居香山（以下十九号まで同じ）。

十二月 五日 例会。新美保秀「我國古伝論語諸古写書入れ中より発見せられた鄭玄論語『魯誥從古』例の新資料」。

一九六〇年（昭和三五）

五月 七日 例会。巨勢進「詩経国風篇と万葉集について」。

六月二十五日 昭和三五年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立九段高校）。午前研究授業（古賀周作、笠井幸）、研究会。午後討議会、上原好一「漢文教科改定の問題について」。

六月二十六日 昭和三五年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。巨勢進「詩経国風と万葉集における表現の一考察」、横山伊勢雄「宋代の詩論について」、藤原高男「老子孫登注二巻に関する一考察」、青木木菟哉「漢碑の文字学的一考察」、緒形暢夫「地域性から見た慎到思想」、鈴木修次「詩紀について」。「高等学校学習指導要領改定についての意見書」を採択。

同日 〈漢文学会々報〉第十九号発行。

十二月 十日 例会。高橋均「先秦諸子と堯舜伝説」、田中有「漢簡の年号についての疑問」、中村嘉弘「史記における武帝朝批判について」。

一九六一年（昭和三十六）

五月二十日 例会。清水栄「史記と太平記」。

六月二十四日 昭和三六年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立北野高校）。午前研究授業（長谷川節三、市木武雄）、研究会第一部。午後研究会第二部、上原好一、鎌田正「新指導要領の問題点」。

六月二十五日 昭和三六年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。清水栄「史記正義佚文の来源と真偽」、高橋均「政權授受の方式よ

りみたる孟子の政治思想、田中有「居延漢簡に関する一考察」、中村璋八「現行本易緯と易緯佚文について」、木村郁二郎「毛沢東の知識人論」、内山知也「『補江総白猿伝』の成立年代について」、前野直彬「唐詩における自然について」。

同日 〈漢文学会々報〉第二十号発行。編輯者、東京教育大学漢文学会代表者内野熊一郎（以下二二号まで同じ）。

七月 八日 例会。沼口勝「六朝の遊仙詩について」。

十月 七日 例会。望月真澄「書評、藤堂明保著『中国語音韻論』」、横山伊勢雄「滄浪詩話の問題点について」。

十一月 四日 例会。高橋稔「六朝志怪の民話性について」、鈴木修次「文学史における『進歩』について」。

一九六二年（昭和三十七年）

二月 三日 二月例会。安居香山「中国古代人の世界観について」、巨勢進「詩経の頌について」。

四月二三日 講演会（於教育大学）。京都大学教授吉川幸次郎「中国研究の意義」。

五月二五日 〈漢文学会々報〉第二十一号発行。

六月二三日 昭和三十七年度漢文学会総会漢文教育研究会（於赤城台高校）。研究授業（月洞謨）、研究会。

六月二四日 昭和三十七年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。沼口勝「六朝の詠懷詩について」、中村嘉弘「司馬遷の『天道』に対する懷疑と不信について」、許常安「詩に反映せる日清戦争」、千原勝美「明治初期、松本辺における漢学の様態」、加賀栄治「欧陽修の態度」、藤川正教「王莽時代における宗廟説について」、寺岡龍含

「敦煌本南華真經書年代考」。

一九六三年（昭和三十八年）

一月 例会。青木五郎「史記における我が国の優位性」、許常安「明鄭時代の愛国詩人」。

二月 例会。小倉勇三「文芸講話と丁玲批判」、金子彰男「董仲舒の対策せる年代についての一考」、沼口勝「詩語としての『桃花源』（又は桃源）について」。

四月二十日 例会。高橋均「最近中国に於ける孔子評価の論争について」。

五月十八日 例会。高橋稔「六朝志怪に於ける説話形成」。

五月二五日 〈漢文学会々報〉第二二号発行。

六月 七日 講演会（於教育大学）。慶応義塾大学教授奥野信太郎「第二の叙情——中国詩の一つの様相——」。

六月二二日 昭和三十八年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立志村高校）。研究授業（宮沢康造、望月真澄）、研究会。

六月二三日 昭和三十八年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。大久保隆郎「王充における頌漢思想の必然性について」、清水栄「太平御覽引論衡について」、高橋均「墨子の兼愛思想について」、藤原高男「居延木簡における鑽炊改火について」、塚田清策「書道史上から見た甲骨文字と金文について」、安居香山「王莽の符命について」、古沢未知男「万葉集の虚構性作品と中国文学」、松下忠「鈴木松塘と袁枚」、小島政雄「屈原伝と楚辭の漁夫」。

七月 六日 例会。清水栄「太平御覽引論衡について」。

九月二八日 例会。田中有「蘭亭序に関する疑問」。今井宇三郎

「書評、鈴木由次郎著『漢易研究』」。

十一月三十日 例会。中村嘉弘「歌行と送別」、宮内保「晚清小説界に於ける梁啓超評論について」。

一九六四年（昭和三十九年）

一月二五日 例会。青木五郎「史記索隱の注釈文的考察」、鈴木修次「王維の詩における『空』と『白雲』」。

二月十五日 例会。平松辰雄「茅盾の処女作『蝕』について」、緒形暢夫「戦国策諸篇に於ける紀年の問題」。

五月 九日 例会。横山伊勢雄「梅堯臣の詩と詩論」。

六月二五日 〈漢文学会々報〉第二三号発行。編輯者、鈴木修次、今井宇三郎。

六月二七日 昭和三十九年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立城北高校）。研究授業（設楽武志、大坂泰）、研究会第一部。研究会第二部、青木木菟哉「漢文訓読法の問題点」。

六月二八日 昭和三十九年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。大久保隆郎「王充の古典解釈について」、許常安「丘逢甲の詩について」、清水栄「王充と司馬遷」、内山知也「沈既濟と小説」、千原勝美「藩学の解体と学校創設期における漢文の問題」、鈴木修次「『詩品』の文学意識」。

九月二六日 講演会（於教育大学）。東大教授赤塚忠「中国古代の河川祭と詩経」。

十月二四日 例会。加治信之「王充の天人感応論について」、清水栄「猿投神社蔵史記古鈔本について」、杉森久弥「『女誡』の近代の意義」。

十一月 七日 例会。丸山昇「魯迅の文学運動について」、許常安「丘逢甲の詩について」、田中有「章草について」。

十二月十二日 例会。水沢利忠「佐野文庫蔵伝宋李太白文集について」。

一九六五年（昭和四十年）

一月二三日 例会。高橋均「中国見聞談」。

二月 六日 例会。大久保隆郎「『論衡』に現われた世界観」、平松辰雄「革命文学論戦と茅盾」。

五月 八日 例会。宮内保「中国近代の文学思想」、小嶋政雄「干支紀年について」。

六月二五日 〈漢文学会々報〉第二四号発行。編輯者、田部井文雄、今井宇三郎、大久保隆郎（以下二五号まで同じ）。

六月二六日 昭和四十年年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立杉並高校）。研究授業（土屋裕、井関義久）、研究会第一部。研究会第二部、鵜城紀元「漢文入門篇の問題点について」。

六月二七日 昭和四十年年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。委員長小林信明。宮内保「晚清期の翻訳小説」、許常安「晚清『詩界革命』の詩について」、清水栄「王充評価に関する二、三の問題点」、内山知也「沈既濟と小説」、緒形暢夫「先秦諸子の『習俗』観」。講演、小林信明「易の九六について」。

十月 八日 例会。牛島徳次「新中国見聞談」。

十一月十三日 講演会（於教育大学）。お茶の水女子大学教授倉田淳之助「詩語について」。

十一月二六日 諸橋徹次先生文化勲章受賞祝賀会（於茗溪会館）。

十二月十一日 例会。向嶋成美『『文心雕龍』の批評論について』、横山伊勢雄「蘇東坡の画論」。

一九六六年（昭和四一年）

一月二二日 例会。宮内保「清末の紅樓夢評論」、大久保隆郎「中國古代の唯物論」。

二月 五日 例会。巨勢進「『三家詩』考」、平松辰雄「『子夜』までの茅盾」。

五月 七日 例会。高橋均「現代中国哲学の方向と問題」、松尾善弘「中国文字改革運動略史」。

六月二五日 昭和四一年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立九段高校）。研究授業（田部井文雄）、研究会第一部。研究会第二部、渡辺弘一郎「子規の『木屑録評』」。

同日〈漢文学会々報〉第二五号発行。

六月二六日 昭和四一年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。桜田芳樹「『固窮の節』の展開について」、前田利昭「瞿秋白と魯迅」、宮内保「晩清の歴史小説」、大橋定雄「漢文学習指導上の論点」、木村郁二郎「鄧中夏について」、内山知也「許堯佐とその小説」、水沢利忠「蘆東山の思想」、牛島徳次「中古漢語の疑問文」。

十月二二日 拡大例会。鈴木修次「新中国の現実と文化大革命」。
十一月十九日 講演会（於教育大学）。早稲田大学教授安藤彦太郎「中国文化界の動向」。

一九六七年（昭和四二年）

五月二十日 月例会。松尾善弘「大衆語運動について」、前田利昭「抗日戦争期の周而復について」。

六月十五日 〈漢文学会々報〉第二六号発行。編輯者、水沢利忠、横山伊勢雄（以下二七号まで同じ）。

六月十七日 昭和四二年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立武蔵丘高校）。研究授業（金子泰三）、研究会第一部。研究会第二部、大木春基「中学校の古典教育について」。

六月十八日 昭和四二年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。委員長鎌田正。柚木利博「詞集『花間集』について」、桜田芳樹「陶淵明の『文学ころ』について」、中村俊也「荀子の性説形成について」、大久保隆郎「王充の命論について」、高橋稔「六朝説話の伝説性と昔話性について」、田部井文雄「杜詩における老境表現」、志村和久「文字論の対象とその方法」、鈴木修次「正始詩について」。

七月十五日 月例会。清水久美子「草明研究」、向嶋成美「鮑照『擬行路難』について」。

十月十四日 月例会。柚木利博「詞と妓女」、謡口明「惠施の思想について」。

十一月二五日 月例会。高木重俊「庾信の賦について」、巨勢進「『詩経』と孔子」。

一九六八年（昭和四三年）

六月十五日 〈漢文学会々報〉第二七号発行。

六月二二日 昭和四三年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立秋川高校）。研究授業（戸井田行世）、研究会第一部。研究会第二部、水沢利忠「欧米視察報告」。

六月二三日 昭和四三年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学G三〇七号室）。柚木利博「李煜詞における表現法の特徴」、前田利

昭『白求恩大夫』改訂にみられる周而復のリアリズムの深化、向嶋成美「鮑照の詩風について」、宮内保「晚清における抒情について」、亀原壮夫「唐詩における直喻と隠喻について」、大久保隆郎「桓譚と王充について」、高橋均「君子について」、伊藤虎丸「初期魯迅における“人”の概念について」、内山知也「離魂記について」、志賀一朗「王陽明の『自得』について」。昭和四三、四四年度委員長牛島徳次。

「教育大学における紛争により、四十三年度中に月例会をもつことができなかった」(『学会叢報』)。

一九六九年(昭和四四年)

四月十九日 学会委員会。「四十四年度の大会、総会、漢文教育研究会の開催を九月末に延期することを決定し、全会員に通知」。

六月二一日 月例会(於豊島振興会館)。中村俊也「荀子の偽について」、漢文教育研究会をめぐるシンポジウム、問題提起松尾善弘。

七月十九日 月例会(於豊島区民センター)。児玉公彦「管子書中における法思想について」、漢文教育をめぐるシンポジウム、問題提起桜田芳樹。

九月二十日 昭和四四年度漢文学会総会(於豊島区民センター第四第五会議室)。中村俊也『無為』と『偽』、中川太郎「陶淵明の作品に現れた植物について」、松尾善弘『五四』期における蔡元培。漢文教育研究会「漢文学研究と漢文教育」、問題提起江連隆、松尾善弘。

同日 〈漢文学会々報〉第二八号発行。編輯者、漢文学会内山知也、高橋均(以下二九号まで同じ)。

十月十八日 月例会。山中恒己「訪中旅行報告」、総会の総括。

一九七〇年(昭和四五年)

七月十八日 月例会。山中恒己「楊朱派の存在とその先秦諸家との思想的関係についての一試論」、近藤龍哉「文芸大衆化問題と張天翼について」。

九月十九日 昭和四五年度漢文学会総会漢文教育研究会(於巣鴨学園)。研究授業(小林五佐美、大木春基)、研究会第一部。研究会第二部、講演、鎌田正「国語科指導要領改訂案について」。

九月二十日 昭和四五年度漢文学会総会研究発表会(於教育大学)。佐治俊彦「左翼作家連盟と太陽社」、横山伊勢雄「黃庭堅の詩法」、沼口勝「庾信の晩年の文学について」、中村嘉弘「謝靈運の山水詩について」、内山知也「堀辰雄と漢文」。講演、小林信明「古と今」。昭和四五、四六年度委員長鎌田正。

同日 〈漢文学会々報〉第二九号発行。

十二月十一日 月例会。堀池信夫「名家思想と『莊子』の関係について」。

一九七一年(昭和四六年)

二月二十日 月例会。中村俊也「孟荀二子の堯舜の政權授受に関する説に見える二子の天論の特質について」。

六月二十日 〈漢文学会々報〉三十号発行。編輯者、今井宇三郎、内山知也、巨勢進(以下三一号まで同じ)。

六月二六日 昭和四六年度漢文学会総会漢文教育研究会(於都立白鷗高校)。研究授業(太田実)、研究会第一部。研究会第二部、松尾善弘『学而時習之』の『習』について、長谷川節三「漢文教育

における二、三の問題点について」。

六月二七日 昭和四十六年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。野原薫「揚雄における諷諫について」、後藤秋正「曹植の晩年の詩について」、松本肇「姚鼐の古文に見る美文容認の志向」、中村俊也「荀子の後王について」、青木五郎「司馬貞と劉知幾」、鈴木修次「秦州時代の杜甫」。

十月十六日 月例会（於教育大学）。樋口靖「中国語生成音韻論について」、堀池信夫「郭象の自得について」。

一九七二年（昭和四十七年）

六月二十日 〈漢文学会々報〉第三十一号発行。

六月二四日 昭和四十七年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立三田高校）。研究授業（土屋裕、青木木菟哉）、研究会第一部。研究会第二部、井関義久「分析批評と漢文教育」。

六月二五日 昭和四十七年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。樋口靖「中国語補語の構造についての一考察」、中村俊也「荀子の思想と呂氏春秋の思想」、大久保隆郎『『呂氏春秋』と『論衡』』、高橋均「孔子集団と士」、松本昭「北京語の音節」。講演、松下忠「私の研究方法について」。午後五時から松下忠氏学士院賞恩賜受賞祝賀会並びに学会懇親会（於湯島聖堂）。

十一月二五日 月例会（於教育大学）。堀池信夫「裴頠の『崇有論』について」、松本肇「袁中郎の文学」。

一九七三年（昭和四十八年）

一月二七日 月例会（於教育大学）。相原茂「『把』字句の諸問題」、小杉順一「般若心経について」。

五月二六日 月例会（於教育大学）。後藤秋正「魏晉の雜詩について」。

六月二九日 〈漢文学会会報〉第三十二号発行。編輯者、内山知也、中村俊也（以下三三号まで同じ）。

六月三十日 昭和四十八年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立両国高校）。研究授業（糟谷一）、研究会第一部。研究会第二部、江連隆・井関義久「漢文教育とOHP」、土屋泰男「新教育課程における漢文教育の問題点について」。

七月 一日 昭和四十八年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。委員長鎌田正。大久保隆郎「論衡」明彗篇とその問題点について、青木五郎『『莊子』の郭象注について』、田部井文雄「杜甫の絶句について」、藤原高男「足利学校遺蹟図書館所蔵老子河上公注鈔本について」、緒形暢夫「忍について」、志賀一朗「湛甘泉における『勿忘勿助』」、渡辺弘一郎「雍のうえのつゆ」。

十月二七日 月例会（於教育大学）。安藤信広「隋詩の一側面」、中島東「戴季陶イズムに関する一考察」、山野清二郎「懷風藻の詩風の変遷について」。

十一月三十日 月例会（於教育大学）。松本肇「帛有光の文学」、越川恵子・浜口富士雄「十全大会前後にみる孔子批判」。

一九七四年（昭和四十九年）

六月二二日 昭和四十九年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立東村山高校）。研究授業（宮沢康造、狩野二郎）、研究会第一部。研究会第二部、池沢正夫「古典教育における漢文の問題」。

同日 〈漢文学会々報〉第三十三号発行。

六月二三日 昭和四十九年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。越川恵子・浜口富士雄「十全大会前後の孔子批判論文について」、大久保隆郎『論衡』の『妖』について、高橋均「孔子世家について」、伊藤虎丸『幻燈事件』をめぐる魯迅論のさまたま、岩崎富久雄「文字改革と批林批孔」講演、鎌田正「朱子の春秋学」。委員長牛島徳次。

十一月 二日 月例会（於教育大学）。中山至「高青邱の文学観」、安藤信広「薛道衡の文学」。

十一月三十日 月例会（於教育大学）。桜田芳樹「劉大杰『中国文学發展史』について」、巻和泉「初期巴金と無政府主義の問題について」。

一九七五年（昭和五十年）

二月 一日 月例会（於教育大学）。堀池信夫「嵇康の『養生論』について」、間嶋潤一「周礼解釈」。

六月二二日 昭和五十年漢文学会総会漢文教育研究会（於教育大学）。漢文教育研究会シンポジウム「古典Ⅱ乙漢文の指導について」、問題提起加藤章、若林力、渡辺修一郎、懇談会「学会今後の運営について」。

同日 漢文学会々報」第三四号発行。編輯者、田部井文雄、中村嘉弘、向嶋成美（以下三五号まで同じ）。

六月二二日 昭和五十年漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。長瀬瑞巳「章炳麟『五無論』について」、小谷一郎「創造社論」、安藤信広「盧思道の文学について」、相原茂「『很不+形容詞』について」、大久保隆郎「『股本紀』考」、志賀一朗「湛甘泉の『二葉合一』

について」、水沢利忠「君山灌川資言の為人」、渡辺弘一郎「『沢及昆虫則聖人婦之』につき」。委員長鈴木修次。

十月二五日 月例会（於教育大学）。鈴木修次「文選の詩と唐の『省試詩題』」。

十二月 六日 月例会（於教育大学）。後藤秋正「西晋時代の四言詩について」、向嶋成美「魏晉の『七哀詩』について」。

一九七六年（昭和五一年）

一月三一日 月例会（於教育大学）。中村俊也「孔広森の『春秋』論」、横山伊勢雄「倪瓚について」。

五月二二日 月例会（於教育大学）。松本肇「表現のめざすもの」、加藤敏「九日詩」。

七月 三日 昭和五一年度漢文学会総会漢文教育研究会（於都立練馬高校）。研究授業（加島直吉）、研究会第一部。研究会第二部シンポジウム「古典Ⅱ乙漢文の指導について」、問題提起金子泰三。

同日 漢文学会々報」第三五号発行。

七月 四日 昭和五一年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学）。間嶋潤一「鄭玄の『獲麟』解釈について」、安藤信広「顔之推の文学について」、相原茂「北京語声調の首韻論的解釈」、桜田芳樹「娼婦」考」、中村嘉弘「元好問の喪乱詩について」、中野達「中国運観考」。昭和五二、五三年度委員長牛島徳次。

十一月十三日 月例会（於教育大学）。松本肇「柳宗元の文学」、大上正美「阮籍詠懷詩の表現構造について」。

十二月 四日 月例会（於教育大学）。伊藤虎丸「故事新編について」。

一九七七年（昭和五二年）

二月十九日 月例会（於教育大学）。小谷一郎「一九二七年～一九二九年の創造社」、横山伊勢雄「謝榛の詩法について」。

六月二五日 昭和五二年度漢文学会総会漢文教育研究会（於学習院高等科）。研究授業（間嶋潤一）、研究会第一部。研究会第二部討論会「今後の漢文教育研究会のあり方」。

同日 〈漢文学会々報〉第三十六号発行。編輯者、水沢利忠、中村嘉弘。

六月二六日 昭和五二年度漢文学会総会研究発表会（於教育大学G三〇七）。加藤敏「陳子昂の詩について」、中山至「高啓の楽府について」、松本肇「韓愈について」、宮内保「清末民国初の文学について」、菅野礼行「白居易の詩における『雪・月・花』について」。総会の「議事」(一)として「学会の今後のあり方について」。総会後の委員会で新委員長に水沢利忠。

一九七八年（昭和五三年）

三月 末日 東京教育大学閉学。「研究室での最後の委員会」開かれる。

六月二四日 〈漢文学会々報〉第三十七号発行。編輯者、東京教育大学漢文学会牛島徳次、中村嘉弘。印刷所、共立社印刷所。発行所、茨城県新治郡桜村筑波大学文芸言語学系事務室内漢文学会。

同日 昭和五三年度漢文学会大会（於品川文化会館）。安藤信広「庚信の文学について」、後藤秋正「魏晉における『慷慨』について」、高木重俊「盧照鄰の文学」、大久保隆郎「王充の古典意識」、月洞謙「經典釈文索引編集について」。漢文教育研究会、金子

彰男「『掃去来之辞』の指導をめぐる」。総会の議事(二)として「漢文学会の改組について」。「同窓会暫定委員」、「研究会暫定委員」を選出。

一九七九年（昭和五四年）

六月二三日 昭和五四年度漢文学会大会（於品川文化会館）。白井啓介「中国現代文学について」、加藤敏「張九齡の感遇詩について」、青木五郎「莊子郭象序の真偽問題について」、菅野礼行「菅原道真の詩に及ぼせる楚辞の影響」、謡口明「思想教材の図式化について」、上田武「新学習指導要領の実施に際しての漢文教育のあり方について」、福田芳典「多様な生徒に対応するための漢文教育の方法」、加賀栄治「稷下の学の一性格」。総会の議題(二)として「東京文理科大学・東京教育大学漢文学同窓会会則案」、「大塚漢文学会会則案」の審議。総会次第の(四)に「東京教育大学漢文学会終束の宣言」。大塚漢文学会発足。委員長加賀栄治。

七月三十日 大塚漢文学会第一回委員会（於茗溪会館地下）。

十月二七日 第二回委員会、第一回編集会議（於大塚奴寿司）。

十一月二四日 第二回編集会議（於池袋田舎家）。

一九八〇年（昭和五五年）

一月十九日 第三回編集会議（於池袋田舎家）。

二月二三日 第三回委員会（同前）。

三月十六日 漢文教育座談会（於茗溪会館会議室）。

四月十二日 第四回編集会議（於大塚奴寿司）。

五月二四日 第四回委員会（同前）。

六月二八日 〈中国文化―研究と教育―一九八〇〉、〈漢文学会々

報〕第三八号発行。大塚漢文学会学会報としての第一号。編輯者、大塚漢文学会伊藤虎丸、内山知也、佐治俊彦(以下四十号まで同じ)。印刷所、共立社印刷所。発行所、茨城県新治郡桜村筑波大学文芸言語学系横山研究室内大塚漢文学会。資料D参照。

同日 昭和五五年度大塚漢文学会大会(於豊島区民センター)。小松建男『古今小説』の古と今、大塚秀明「現代漢語の介詞構造と連動式」、広野行雄「革命文学論戦から国防文学論戦への連続性について」、安藤信広「駱賓王の文学について」、松本肇「韋応物の文学」、町田静隆「五十七年度指導要領と漢文教材」、宮本佳昭「漢文教育の問題点」、中野達「陶淵明と『列子』」、小嶋政雄「春秋の歴法に就いての試論」。

一九八一年(昭和五六年)

六月二七日 〈中国文化―研究と教育―〉一九八一、〈漢文学会々報〉第三九号発行。

同日 昭和五六年度大塚漢文学会大会(於豊島区民センター)。高橋明郎『論語全解』について、鷲野正明「帛有光と寿序」、阿川修三「台湾時代の章炳麟について」、大上正美「阮籍の『為鄭冲勅晋王牋』について」、篠原有太「入門期の一指導」、杉田進「高校漢文教育をめぐる諸問題について」、佐治俊彦「現代中国文学に於ける人道主義・人性論をめぐる」、沼口勝「陶詩の序をめぐる」、望月真澄「上古中国語に於ける唇音声母の一特性」。

一九八二年(昭和五七年)

六月二六日 〈中国文化―研究と教育―〉一九八二、〈漢文学会々報〉第四十号発行。

同日 昭和五七年度大塚漢文学会大会(於豊島区民センター)。白井啓介「文明新戯と現代話劇」、伊藤虎丸『語絲』の周作人拾い読み、高橋均「春秋事語」について、沼口勝「阮籍の賦について」、渡辺雅之「一授業の展開例としての故事成語」、謡口明「論語の指導」、中野達「独化と往復」、牛島徳次「現代漢語の虚詞について」。

一九八三年(昭和五八年)

六月十八日 〈中国文化―研究と教育―〉一九八三、〈漢文学会々報〉第四一号発行。編輯者、伊藤虎丸、松村英夫、大上正美、佐治俊彦、阿川修三。

同日 昭和五八年度大塚漢文学会大会(於豊島区民センター)。中野将「庾信『詠画屏風詩』二十四首について」、高橋明郎「文潞公の詩について」、加藤敏「初唐詩と陳子昂について」、安藤信広「詩経」と『楚辭』への視点、伊藤虎丸「魯迅の故事新編について」、桜田芳樹「名とタブー」、沼口勝「阮籍賦考」、高橋均「古抄本論語義疏をめぐるいくつかの問題」、青木木菟哉「新教育課程国語Iの漢文」。

十一月 六日 月例会。吉田聡美「李賀における時間の形」、田部井文雄「漢文教育の諸問題」。

一九八四年(昭和五九年)

二月十二日 月例会。吉原英夫「游俠としての韓信」、松本肇「陶淵明の帰鳥詩をめぐる」。

五月十三日 月例会。阿部博幸「『四世同堂』における『准备』と『预备』の現われ方について」、国金海「二」江戸時代の助字研究

について」。

六月十八日 「中国文化―研究と教育―」一九八四、〈漢文学会々報〉第四二号発行。編輯者、伊藤虎丸、謡口明、大上正美、佐治俊彦、安藤信広、阿川修三（以下四三号まで同じ）。

同日 昭和五九年度大塚漢文学会大会（於東京都教職員互助組合教育会館）。阿川修三「章炳麟について」、相原茂「身体部位名詞について」、松本肇「韓愈の詩にみる攻撃性の変容について」、堀池信夫「東漢の『読為』について」、樋口靖「白先勇論」、上田武「陶淵明の年譜上の問題点について」。漢文教育シンポジウム「高校漢文教育における教材について」、谷川英則、金子彰男、加藤章。十一月 四日 月例会。島田弥生「陶淵明の『帰』をめぐって」、谷口真由実「杜甫の戯題詩について」。

一九八五年（昭和六十年）

二月 十日 月例会。中野将「庾信の銘をめぐる幾つかの問題」、松本肇「杜甫における『杖藜』について」。

六月二二日 「中国文化―研究と教育―」一九八五、〈漢文学会々報〉第四三号発行。

同日 昭和六十年大塚漢文学会大会（於東京都教職員互助組合教育会館）。阿部博幸「『別個』考」、増野弘幸「函風七月の特質をめぐる」、加藤敏「元結の詩について」、白井啓介「傳雷とその家書について」、中村俊也「莊存与の『春秋要旨』について」、沼口勝「阮籍の四言詠懐詩について」、中村嘉弘「龔自珍の『宥情』と戒詩について」。漢文教育シンポジウム「高校漢文教育における指導法をめぐる」、加藤章、町田義春、菅原直香、渡辺雅之。昭

和六一、六二年度委員長水沢利忠。

十一月 三日 月例会（於校蔭会館）。加固理一郎「李商隱の初期の詩風について」、松村茂樹「山堂清話」について」。

一九八六年（昭和六一年）

六月二八日 「中国文化―研究と教育―」一九八六、〈漢文学会々報〉第四四号発行。編輯者、伊藤虎丸、謡口明、大上正美、佐治俊彦、安藤信広、佐藤一樹、阿川修三（以下四五号まで同じ）。

同日 昭和六一年度大塚漢文学会大会（於東京都教職員互助組合教育会館）。谷口匡「韓愈の貞元年間の書簡文について」、加固理一郎「李商隱とその周辺の詩人たち」、谷口真由実「杜甫の『潦倒』について」、中野将「江淹の詩について」、佐藤一樹「梁啓超のジャーナリズム活動について」、青木五郎「日本古典文学の典拠となる漢詩文についての二、三の問題」。漢文教育シンポジウム「漢文訓読の送り仮名法について」、古原英夫、木村秀次。

十二月 七日 月例会（於校蔭会館）。三上英司「韓愈の墓誌銘について」、安藤信広「『文心雕龍』について」。

一九八七年（昭和六二年）

六月二七日 「中国文化―研究と教育―」一九八七、〈漢文学会々報〉第四五号発行。

同日 昭和六二年度大塚漢文学会大会（於東京都教職員互助組合教育会館）。松村茂樹「項元汴收藏の千字文編号について」、小野塚相三「公孫龍子」守白の論について」、加固理一郎「李商隱の古文から駢文への転向について」、小谷一郎「一九二〇年代中国の思想分化」、大塚秀明「いわゆる『欧化語法』について」、沼口勝

「自伝について——陶淵明の場合」、高橋均『『論語義疏』の日本伝来期について』。漢文教育シンポジウム「総合国語の中における漢文の位置」、安藤信広、長瀬瑞己、大上正美、謡口明。昭和六三、六四年度委員長、水沢利忠。

十二月十三日 月例会（於校蔭会館）。中野将「江淹後集と『才尽』」、中村俊也「公羊学の師承」。

一九八八年（昭和六三年）

三月十二日 月例会（於筑波大学学校教育部会議室）。菅本大二『『韓非子』「解老篇」について』、坂口三樹「陶淵明の園田について」。

六月二五日 「中国文化——研究と教育——」一九八八、〈漢文学会々報〉第四六号発行。編輯者、大塚漢文学会伊藤虎丸、高橋均、謡口明、大上正美、佐治俊彦、安藤信広（以下四七号まで同じ）。

同日 昭和六三年度大塚漢文学会大会（於東京都教職員互助組合教育会館）。菅本大二『『韓非子』「喻老篇」について』、小野塚相三『『墨子』の尚賢篇の成立について』、加固理一郎「李商隠の祭文について」、中田伸一「烟花三月下揚州について」、増野弘幸「詩経における鳥について」、大上正美「鍾会をめぐる一試論」、高橋均『『論語義疏』における邢昺疏竄入について』、志賀一朗「王陽明と九華山行」。漢文教育シンポジウム「大学における漢文教育の現状と問題点」、高木重俊、内山知也、青木五郎、田部井文雄。

十二月 三日 月例会（於筑波大学学校教育部会議室）。阿部博幸「現代中国語における存在表現について」、阿川修三「李沢厚の孔子評価について」。

一九八九年（昭和六四年、平成二年）

三月十一日 月例会（於筑波大学学校教育部会議室）。佐藤一樹「近代思想史の枠組の再検討」、加賀栄治「『礼』經典の定立をめぐる」。

六月二五日 「中国文化——研究と教育——」一九八九、〈漢文学会々報〉第四七号発行。

同日 平成元年度大塚漢文学会大会（於東京都教職員互助組合教育会館）。村田和弘『『二拍』の物語とその評価について』、白井啓介「中国話劇の台詞について」、中田伸一「蘇軾の黄州寒食詩巻と李常」、上田武「李商隠詩と陶淵明」、青木五郎『『野ざらし紀行』の『富士川捨子』の条をめぐる』、伊原大策「明代白話における『正在V』の成立」、牛島徳次「日本における中国語文法研究略史」。漢文教育シンポジウム「新学習指導要領について」、町田静隆、毛利順男、田部井文雄、謡口明。平成元、二年度委員長水沢利忠。

十一月二五日 月例会（於筑波大学学校教育部第二会議室）。大塚秀明『『官話』という言葉について』、加藤敏『『輞川集』の構成と解釈をめぐる』。

一九九〇年（平成二年）

三月 十日 月例会（於筑波大学学校教育部第一会議室）。間宮聡子「杜甫詩中の『馬』と『鷹』」、河内利治「黄道周の『書品論』について」。

六月二三日 「中国文化——研究と教育——」一九九〇、〈漢文学会々報〉第四八号発行。編輯者、高橋均、謡口明、大上正美、安藤信広、

小谷一郎、白井啓介（以下四九号まで同じ）。

同日 平成二年度大塚漢文学会大会（於東京都教職員互助組合教育会館）。谷口匡「朱彝尊の詩論をめぐって」、加藤敏「初唐詩における水石の描写と元結の詩文について」、安藤信広「嵇康の文学と思想について」、上田武「天道幽且遠、阿川修三「周子同について」、中村俊也「魏源の公羊学について」、中野達「『老子』の王弼注における道と無」、安居総子「論語の指導」、小倉勇三「漢文授業の起承転結」、青木五郎「中国における古典教育」。

十二月 一日 月例会（於桜蔭会館）。大塚秀明「初出誌における魯迅小説の語彙語法について」、吉原英夫「李陵の禍について」。

一九九一年（平成三年）

三月 九日 月例会（於桜蔭会館）。平野和彦「康有為の芸術論とその周辺」、白井啓介「中国映画の現状と問題点」。

六月二十九日 「中国文化——研究と教育——」一九九一、「漢文学会々報」第四九号発行。

〔資料 A〕

○ 学会発会式

学校内外の久しき待望の中に、発会の準備をささ怠りなかりし我漢文学会は、いよ／＼その機を得て、茲に昭和七年二月二十日午後一時より、本館第二会議室にその発会式を挙げぬ。職員・先輩・学生・生徒、凡べて参会者百有余名に達し、式は盛況裡にいと厳粛に進められたり、その次第概況左の如し。

（一） 発会式

- | | |
|--------|-------------|
| 一、開会之辭 | 田 波 又 男 君 |
| 一、経過報告 | 藤 川 熊 一 郎 君 |
| 一、会長挨拶 | 島 田 教 授 |

本日は、此く大方の御参列を戴きまして、我が漢文学会発会の式を挙げ得ました事は、不肖会長として、此の上もない喜びであります。顧みまするに、我々が漢文学会を興したいと希望致しましたのは、昨今のことではないのであります。が只其の遺憾なき準備と、適當なる機会とを待つ為に遂に今日に及んだのであります。然るに本学も開設以来三年を経まして、幾多の建設事業の結果、漸く諸制も完成し、殊に昨秋は畏れ多くも陛下の御臨幸を仰ぎ、優渥なる御勅語まで賜ったのであります。我々は等しく聖旨の辱けなさに感激し、自らの責務の重大さを痛感致したのであります。此の時に当り、我が学会創設の機運も亦熟しまして、遂に今日に於て漢文学会

発会の儀を見るに到りました。抑々学会は他の何れの学会に於ても然るが如く、其の自由なる研究によって課業の欠陥と不備とを補ひ、相互の結合に於て、学園の完全なる発達を期すべきであります。然らば学会の使命は実に広く大きいのであります。其の先務とする所は、学風の樹立に在る。本学は今にして始めて諸制の完成を見たと言ひましても、其の実は光輝ある六十年の歴史を背影としての大学であります。此の赫々たる歴史は、勿論既に学校の性質に即して立派な学風を樹立して来てゐる。然し我々は此の学風をして、更に新鮮にして気概あらしむべきであります。今東西に於ける斯学の傾向を見ますに、夫々抛つて立つ処がありますが、仔細に検討すれば一長一短であります。我々は、直に斯学に於てのみでなく、広く天下諸学の動きに注意して、諸学の長を取り、東西の粹を聚め、固より既に有する堅実なる学風に繋して、潑刺たる研究を興し、以て天下に資する所あらんとする者であります。此く考へますと、我が学会の責務は実に重大である。幸にして御参列の諸先生の御指導にまち、会員諸子の努力によつて、本学会の機能をして遺憾ならしめん事を、切に希望して休まない次第であります。(文責在筆記者)

(一) 学長祝辞
顧問祝辞
一、評議員挨拶

大 瀬 学 長
服 部 博 士
内 野 教 授

(二) 記念講演

発会式に引き続き直ちに記念講演に入り、次の順序を以て、夫々熱

弁を振はれたり。

- 一、行不由徑
- 一、竹書紀年につきて

- 一、道を論じて孫中山に及ぶ

- 一、閉会之辞

諸 橋 教 授
原 富 男 先生
小 柳 博 士
小 林 信 明 君

かくて何時しか時は移りて五時半に及び、暮色漸く迫りしかば急ぎ玄関前に記念撮影を終へ、意義深き今日の発会式を了へぬ。

(三) 懇親会

発会式後、直ちに場を神田維新号に設け、午後六時より懇親会を開けり。顧問、評議員以下約三十名の出席者を得て飲語、場に溢れぬ。先づ諸橋教授の挨拶あり、次いで松井博士、塩谷博士、田口、佐藤(正範)、浜野の諸先生交々立つて漢学の大使命を高調せられ、若き学徒を激励せられたり。

酒杯幾度か廻り、宴漸く酣なるに及べば、塩谷博士得意の桜井駅を音吐洪亮朗吟せられ、満座三嘆を禁じ得ず、続いて原先生の支那民謡、小林君の詩吟等、尽くるなき興を添へて、春未だ到らざるに春風座に満ち、我が学会の前途まことに洋々乎たるものありき。九時散会せり。

復刊の辞

竹田 復

我が漢文学会会報は、昭和十七年度で休刊のやむなきに至ったが、茲に復刊第一号を発行し得ることになったのは、学界のため御同慶に堪えない。中国に関する学会は、一昨年の秋、綜合されて全国的の中国学会が成立し、多年の懸案が実現され、年一回の年報が発刊の運びになったことは、既に御承知の如くである。しかし中国学会の年報は、経費の關係から紙数にも制限があり、多数会員の要望に満足を与えない現状である。従つて研究室を中心とする研究機関を有する各地の大学では、その所属研究者の研究を発表し得る為、何等かの方法が講じられねばならない。我が漢文学会では、世の秩序の恢復とともに、会員諸君の旺盛な攻究精神に答えるため、発表の方法などに就いて幾度か会合考究の結果、年一回の研究発表会と相俟つて、会報の復刊を企図し、今回漸くその実現を見るに至った。是れ偏に会員諸君の熱誠な後援に依るもので、深く感謝する次第である。

戦争を契機として、中国学問研究の方向は、一転機を劃しつつあるものと思う。思想的研究にせよ、經子学・文学・語学の研究にせよ、何れも生きた中国人の所産である以上、先づ人間の生き方に触れ、その考え方をつきとめ、それから表われる抽象的具体的事象

へと歩みを進むべきで、茲に新しい研究の方法も発見され、研究の態度も確立される。中国の学問のすべては、人間の探究である。すべては彼等の把握した眞の生命・眞の實在が基盤となり、その上に立ち立てられたものといつても過言ではない。しからばその眞なるものは何か。いかに把握したか。それが解明されてこそ学的研究も可能である。存在をそのまま対象とすることは、戒しめねばならない。この方法はそのまま日本漢文学の研究に転用される。日本漢文学の研究は、殆んど未開拓のまま取り残されている。この点是我研究室としては、是非手を着けねばならない。国文・国語乃至は日本史と左提右携、意義深い文化財を今日に生かすことに努力したい。この復刊によつて、会員諸君の真摯熱烈な研究意欲を、一部分でも充し得たことを心から喜び、今後の発展を希望してやまないのである。

記念号刊行の辞

會長 内野熊一郎

東京文理科大学漢文学会は、会報第十四号を、母校の發展的閉学式記念号として、世に送る。執筆者の諸氏は、みなこれ現下我が学会のそれぞれの分野を象徴する人材である。之が月旦は、即ち我が学会二十年余の歩みに対する功罪判定であり、我らは心を虚しくして、その破邪顕正の教示に省思すべく、切に期する所あるものである。此の意味で、本記念号を、私は学会の責任者として、無限の愛

撫と、翼々たる恐心と、烈々たる自己改造の決意とを以て、慎んで
会友並に学界江湖に捧げたい。

抑々我が学会は、故穆堂島田教授を会長に戴き、田波学兄総代と
して昭和七年二月創設せられて以来、斯学の研究と普及とを目標に、
孜孜切瑳して月將の旅をつゞけ、遂に昭和八年三月には、待望の会
報第一号を創刊、些さか学界耆願の恩義に酬いたのであった。爾來
戦時中、数年の休刊雌伏はあったが、諸橋・内野（台）両会長を經
て、竹田教授会長に就かれるや、斯学復興の英圖を實現せられ、昭
和二十六年十一月復刊第十三号を公刊して、先づ本学会の新抱負と
進向づけを呈示せられたのである。二十七年三月、会長竹田教授の
定年退職せられるに及んで、不肖その後図を汚し、今此の記念号に
永い過去千態の謝恩と友愛と感懷とを覃め、遙かなる未來への新生
期待と切願と決意とを盛って、懐しい母校文理科大学漢文学会の發
展的逝遷を送り、且輝かしい教育大学漢文学会の再生を迎へんとす
るものである。

憶へば、万感交々至る学会二十有四年の精進史であつた。会友同
朋凡て二百有余。英材をいただきつゝ、既に幽明を異にした丈夫も幾
人か。私はそれらの明鑑を悼みつゝも、誓を固くするのである。人
生順逆あり、勢ひは時として吾らに已みがたい所。されど、それだ
けに、成敗事に臨んでの吾人が進止は、省思清明であつてほしい。
今や道義の自覺高揚は、真理の探求に一步先んじて三思さるべきで
ある。一言万思、同朋と共に往き、偕学偕成、道の純粹確立の爲に
は、輕毛の一己は敢へて堵せんとするもの。俾に諒せられよ。

（二八・三・一八稿）

〔資料C〕

発刊の辞

中西清

東京教育大学漢文学会は、東京文理科大学漢文学会の後を承け、
今回、その会報を漢文学会会報第十五号として発刊することになつ
た。洵に欣ばしい次第である。

今日、人文系の学会で、學術の専門的研究の会報を出すことは、
経費の点からみて、非常に困難とされている。しかるに會員諸賢が
多大の犠牲を払って、昨年に引続き、本会報を発刊されたことは誠
に感謝に堪えない。

さて本誌掲載の論文は、紙数の制限上、僅かに経学、子学、文学、
日本漢文学に関するもの各々一篇程度に過ぎないが、これに失望す
ることなく、今後ますます研究の成果を發表されるよう切望して
止まない。

われ／＼学徒の生命は、倦むことなき學問の研究であり、会報誌
上の論文は、わが會員諸賢の平素の研究の結実したものである。ど
うか今後も更に研鑽を続けられ、会報の内容を充実して、わが学会
の發展に寄与せられんことを祈る。

〔資料D〕

新たなるいで立ちにあたりて

委員長 加賀 栄 治

いささか装いを新たにしたこの雑誌のとびらで、今さらことごとしく言挙げするつもりはない。言挙げは、ことごとしいほど虚ろに響くであろう。

だが、われらの学会とわれらの雑誌の新たなるいで立ちを、あえてここに宣言するのは、共につどうわれらの心をひきしめ、世の人々の理解と支援を仰ぎたいからである。

かつて、われらのつどいは、東京文理科大学から東京教育大学へと続いて、その大学の名を冠してきたが、今やそれが消えたかたちとなった。これによって、大学の名を冠することに伴う若干の閉鎖性と、恩師・先輩とのえにしに伴う若干の甘えとから、脱却できたなどとうぬぼれるものでは、けっしてない。

むしろ、重くのしかかってくる大小さまざまな困難を思えば、遙かなる道程へと踏み出す足どりも、ともすればしどろになるのを覚える。

けれども、今やいで立ったわれらの道程では、斯の学の永遠なるかぎり、おのがじしその領域において足下を踏みしめ、学問研究と教育実践にあらんかぎりの力をふりしほり、時々のみを引っさ

げて切磋琢磨するしかないのだ。われらは、この出陣の武者振るいに似た厳しい心の張りを、どこまでも持ち続けようではないか。
天の時はその帰趨なお定かならず、地の利は今のわれらに傾かぬとしても、人の和こそわれらの最も頼りうるものであるかぎり、道程のあなたの光明を、われらは必ず手にしうるのであらう。

世の人々よ、われらのいで立ちを見守りたまえ。

斯の学における公正なる批判を甘受しつつ進まんとするわれらに對し、願わくは、心からなる激励と支援を賜わらんことを。

(一九八〇・三・三一)

編集後記——独白風に——

毎回委員会の場所に困る。寿司屋の二階座敷に集まっていると(ここなら比較的安くすむ)、討入り前の赤穂義士のような気持になってくる——そういう事態にもまして、新しく「中国文化——研究と教育——」と名乗りつつ、同時に「漢文学学会会報通巻三十八号」と称するこの雑誌の表紙が、何よりも端的に、我々が置かれている状況と本誌の性格とを物語っている。それは、母校の移転・拡充が、実は廃止・新設でもあったという教育大と筑波大との関係の現実を忠実に反映しているとも言えるだろう。

教育大の廃学と筑波問題をめぐって、前の委員会では長い苦悩と摸索が続けられたことを私たちは知っている。全会員による「同窓会」と自由参加の「研究会」とに分けるといふ結論に達したのは一

昨年の総会においてだった。道は三つしかなかった。第一は筑波大漢文学会にすること。賛否の「意見」は別にして、現実には筑波大にその可能性がないことを私たちは知らされた。解散しないとすれば、道は、この事態を逆に積極的に受けとめて、旧漢文学会をうけ継ぎつつ、全国的に開かれた、かつ権威ある学会を作っていくことにしかない。

だが果してこの学会と会報を維持出来るか。見通しは明るくはなかったし、今もない。事務所は取敢えず筑波大の横山研究室に引き受けてもらった。彼が在職する限りは、その労を担ってくれるだろう。しかし旧会員四百四十余名中、現在までに学会加入の意志を表明されたのは百二十名にすぎない。会費二千円、まともな雑誌を出すそうと思えば、刊行費の三分の一もまかなえない。昨年の総会で、私は、「三年で潰す覚悟を了承して下さるなら、編集委員長を引き受けよう」と放言した。みじめな内容で醜を天下にさらすくらいなら、三年で潰れてもよいではないか。事実、本号は旧漢文学会会報の最終号であり、同時に「中国文化」創刊号でもあるわけだが、印刷費は、旧漢文学会から引継いだ全額を注ぎこみ、なおすでに大幅な赤字になる。つまり、私たちは本号に、いわば「賭けた」のである。本号を見て下さった各位が、こういう会報を出すことに意義を認めて会に加入し、また同窓以外の同僚や学生にも加入を勧めて下さるか否かに、会の運命のすべてがかかっているのである。悲壮がつているのではない。「身を捨ててこそ……」とか。また楽しき門出ではないか。御支援を切に御願ひ申上げる。

(虎)